



一級建築士 西田 恭子
(三井のリフォーム 住生活研究所 所長)

親子の距離が住まいを決める

実家機能の変化と「近居・隣居」家族の増加

「核家族」を合言葉に家庭を営んできた団塊世代。でも、子供の独立での夫婦ふたりの生活に飽き足らないでいます。「友だち親子」などと言われながら楽しく子供と関わってきた親達は、実家となった今も新しい「家意識」で独立した子供との関わりを作ろうとしているのです。また子供世帯は「どこに住むかは親の家の位置が大きな要因」といいます。信頼できる相手として親を考えながら、育児体制確保と豊かな食生活確立のため、親を戦力として期待しているのでしょう。その結果、別居をしつつも家族とのつながりを深めたいという「近居・隣居」が増えてきました。

近居・隣居スタイルを実現する手法として、「既存住宅購入×リフォーム」があります。隠れたキーワードには「育孫」「介護」があるのですが、親子が、どの距離で住むかが大きな鍵となり、程よい距離の物件探しが重要です。希望エリア物件探しに欠かせない既存住宅の流通の活性化が、親や子供の、近居・隣居をより実現可能にしていくといえます。

では都心事例と郊外型住宅地の隣居事例を見てみましょう。

親子3代・マンション隣居

自宅を売却して買った親世帯のマンションに、今度は子世帯が同マンション住戸を購入。マンション内での隣居を実現しました(図1参照)。

●隣居リフォーム時の設計ポイント

(1) 集まるスペース

土日は親世帯と、夕食を一緒にするのが習慣化し、ゆったりできる空間作り。

(2) 祖母宅での孫のスペース設定

妻が働いているときは、祖母が子供たちの食事し、祖母の住居は子供が昼過ごす場所でもあります。

(3) 子世帯が支援しやすい設定

親世帯のごみ出し、新聞整理、衣替えの出し入れ、電球替えなどを手伝う、誰でも出入りしやすい家とします。

家の継承を考えた二世帯戸建隣居

親の実家近くに土地を探して隣居・近居する方が増えました(図2参照)。

●隣居のメリットとリフォームポイント

- (1) 子世帯側メリット…親孝行・住居費の軽減・食事の軽減・仕事が続けられる
- (2) 親世帯側メリット…食費は増えるというデメリットもあるが、いざという時(介護)に心強い。
- (3) 双方のメリット…所有する車を1台にした。ラフな(パジャマでも可)格好で行き来できる。
- (4) その他
 - ①親世帯のリビングを増築(孫の居場所・祖父母の逃げ場確保)。
 - ②オープンキッチンにする(みんなで作業)。
 - ③他の兄弟も泊まれる可能性をもたす。

近居・隣居の今後

今後も近居・隣居は親世代と子世代が補完しあう社会づくりのしかけとなっていきます。親子の距離感を保ちつつ双方の交流に快適である住宅設計が重要な意味を持ちます。また親の住む地域に子世帯が何らかの形で関わり、住み続けるということは、その地域やコミュニティへの愛着を育み、世代継承にもつながります。近居・隣居は高齢になっても安心して暮らしていける「終の住処」としても、街のあり方として進めたい住居スタイルです。

また、近居・隣居・同居は、誰が親の介護者になるかを定めることにもなり、子供が2人以上の場合は相続問題とも関係してきます。単に便利、楽しいだけでなく、介護と家の継承等の相続時の確認も必要でしょう。

図1●親子3代・マンション隣居

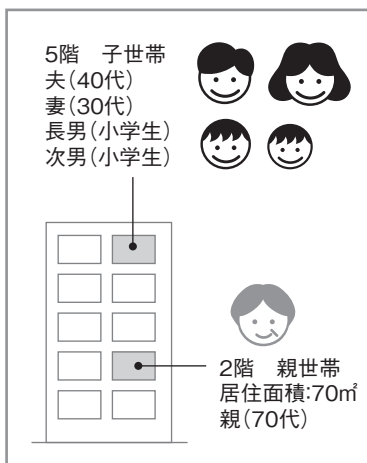


図2●家の継承を考えた二世帯戸建隣居

